【論文】

狂気のメタモルフォーシス
―シェイクスピア作品におけるエクソシズム表象とその娯楽性―

松　岡　浩　史

Metamorphosis of Madness
The Representation and Entertainment Aspect of: Exorcism Rituals in Shakespeare's Dramatic Works

Hiroshi Matsuoka

要旨（Abstract）

As long as the private paper written by the physician Stephen Bradwell is trustworthy, the form of exorcism performed for Mary Glover in 1602 bears close resemblance to today's spectacle show with 'many beholders coming in and going out, sometimes by troupes of 8 or 10 at once.' The symptoms displayed by the demoniac gradually increased intensity, illustrating the theatricality and spectacle. In *All's Well that Ends Well*, surprised by the resurgent of Helen in the final scene, the French King expresses his dismay with the metaphor of exorcism: 'Is there no exorcist / Beguiles the truer office of mine eyes?' An exorcist, previously represented as a charlatan before 1600, is now clearly portrayed as an illusionist in the later works of Shakespeare. This paper discusses when and how this shift occurred, focusing on the representations of exorcism in Shakespeare's dramatic works in the context of entertainment and spectacle made out of early modern curiosity.

キーワード（Keywords）：madness, histeria, exorcism, demonology, entertainment

序

本稿が対象とするのは、シェイクスピア時代におけるエクソシズム表象からみる、狂人見物のスペクタクル性および娯楽性である。イングランド史における狂人の見世物化を考える場合に無視できないのはセント・ベツレヘム慈善院（通称ベドラム）における狂人見物の言説であるが、ミシェル・フーコーは『狂気の歴史』のなかで、次のように述べる。

> Putting the insane on show was doubtless an ancient practice that dated back to the Middle Ages. … As late as 1815, if a report presented to the House of Commons is to be believed, Bethlem Hospital showed its lunatics every Sunday for one penny. The annual revenue from those visits amounted to almost 400 pounds, which means that an astonishing 96,000 visitors came to see the mad each year.
>
> （Foucault, 143）

狂人を見世物にすることは、中世にさかのぼる非常に古い慣習だったことは疑いを入れない。［・・・］ 1815年になっても依然、ロンドン自治体当局へ提出された報告を信じるならば、ベスレム病院は日曜日ごとに１ペニーの料金で躁暴性の狂人を展示した。この見物の年収は約400ポンドに達し、驚くべきことに毎年９万６千人の見物客が狂人見物に訪れたことになる。

フーコーはここで、西欧社会が伝統的に監禁・抑圧してきた狂気のなかに創造的な力を見出すのであるが、狂気の見世物化に関しては、その起源を中世にさかのぼるとしたうえで、狂気がルネサンス期から、フーコーのいわゆる古典主義時代、すなわち17世紀～ 18世紀にかけて見世物化されていったと指摘する。

しかしながら、ここでフーコーが言及しているベツレヘム病院の見世物興行の例は19世紀のものであり[1]、じっさいに同施設が見世物小屋として興行していた資料が現れるのは、ベツレヘム慈善院がロンドン大火（1666年）の後、ビショップスゲイト（Bishopsgate）からムーアフィールズ（Moorfields）に移転された1676年以降のことである。ところが、現実としてシェイクスピア時代にベツレヘム慈善院が「見世物小屋」化していたことを示す証拠は存在しないにもかかわらず、同時代の複数の演劇作品の中ではベドラム見物に関する言及が散見されることは注目に値する。なぜなら、シェイクスピアの時代において既に狂人を娯楽の対象として消費する土壌があり、演劇が現実に先行する形で狂人見物を描いた可能性を示唆するからである。

シェイクスピアの『リア王』においてエドガーが演じるベドラム乞食の所作は、まさに狂人の説明原理としての悪魔憑きをスペクタクルに表象したものであるが、同時代の観客がどのように「狂人」を受容、そして消費していたのか、従来等閑視されてきたこの点を明らかにしない限り、シェイクスピア劇におけるエクソシズムの娯楽性はおよそ知りえないだろう。

１）シェイクスピア劇におけるエクソシズムの表象

17世紀にはいると、ルネサンス演劇はエクソシズムの表象を多用するようになるが[2]、その萌芽はシェイクスピアの作品群に見出せるのかもしれない。シェイクピアはその創作の最初期に『間違いの喜劇』（*The Comedy of Errors*, 1594-5）において、エイドリアーナによって呼び出されたピンチ医師がアンティフォラスを狂人扱いする場面で、医師をエクソシストとして描いている。

PINCH
I charge thee, Satan, hous'd within this man,

---

[1] フーコーが指摘する見物客年間９万６千人という数字はRobert Reedの*Bedlam on the Jacobean Stage*（1952）に依拠するものだが、現代では疑問視されている。 c.f. Carol Thomas Neely, *Distracted Subjects, p.207*.

[2] 17世紀初頭においてエクソシズムを直接・間接に表象している作品としては、John Fordの*The Lover's Melancholy*（1628）, Thomas Middletonの*The Phoenix*（1603-4）、John Websterの*The Duches of Malfi*（1612-14）、Francis Beaumont、John Flecher共作の*The Humorous Lieutenant*（1619）、Barnabe Barnesの*The Devil's Charter*（1606-7）、George Ruggleの*Ignoramus*（1615）などを挙げることができる。

To yield possession to my holy prayers,
And to thy state of darkness hie thee straight;
I conjure thee all the saints in heaven.
（*Err*, 4.4.57-60, *The Arden Shakespeare, Complete Works, 2011*）[3]

おのれサタンめ、この男の体内に住みついたか、
わが聖なる祈りに屈して早々に立ち去るがいい。
暗黒の地獄こそお前の住処なるぞ、急ぎ戻れ、
天の聖者たちすべての御名によって命ずる。

ここでは、人違いを悪魔憑きとして空騒ぎする点で、エクソシズムはFarce（笑劇）の様相を呈しているといえる。

次にシェイクスピアは、『十二夜』（*Twelfth Night*, 1601-2）においてマルヴォーリオいじめの手段として、フェステにプロテスタントのエクソシスト、サー・トパスを騙らせる。

CLOWN
Out, hyperbolical fiend! how vexest thou this man!
Talkest thou nothing but of ladies? （*TN*, 4.2.25-6）

黙れ、仰々しい悪魔め、この男に取り憑くことをやめろ！
お嬢様のことばかり口にしやがって。

CLOWN
Well, I'll put it on, and I will dissemble myself in't, and I would I were the first that
ever dissembled in such a gown. （*TN*, 4.2.4-6）

では、こいつを着て化けるとするか。牧師のガウンを身に着けたものが人を化かすのは、残念ながら俺が初めてじゃない。

ここでフェステが演じるサー・トパスが16世紀末に実在し、英国国教会によって逮捕され有罪判決を下されたピューリタンのエクソシスト、ジョン・ダレルを風刺していることは、これまで多く指摘されてきた。ここで悪魔憑き（demoniac）として笑いの種となるマルヴォーリオもまたピューリタンとして表象されており、この場全体が、エクソシズムをパロディ化し風刺するモードになっている。『間違いの喜劇』も『十二夜』も喜劇であるが、エクソシズムにかんする描写は政治性を帯びたぶん、辛辣さ、深刻さを増しているといえる。

さらに『終わりよければすべてよし』（*All's Well That Ends Well*, 1603-4）の最終場では、死んだはず

[3] 本論におけるシェイクスピア劇の引用はすべてArden全集版に拠っている。

のヘレナが現れたことに驚愕したフランス王に、シェイクスピアは次のように語らせる。

KING Is there no exorcist
Beguiles the truer office of mine eyes?
Is't real that I see? (*AWW*, 5.3.302-4)

この目の正常な働きを欺く
エクソシストがいるのではないか？
私が目にしているものは現実なのか？

ここでエクソシストはもはや悪魔を取り祓う者としてではなく、幻覚を誘発する者として描かれていることからも、シェイクスピアが悪魔憑きやエクソシズムをペテンとみなしていたことは疑いを入れない。

1605年に第１二折本が執筆、上演されたと推定される『リア王』（*King Lear*, Q1,1605）においては、エドガーが演じるベドラム乞食のトムによって、悪魔憑きが表象される。

EDGAR
Who gives anything to Poor Tom? Whom the foul fiend hath led through fire and through flame, through ford and whirl-pool, o'er bog and quagmire; …
(*Lr*, 3.4.50-52)

哀れなトムになにか恵んでくれないかい？悪魔に引きずり回されてるんだ、火をくぐり、炎を抜け、浅瀬や渦巻きを通り、沢や沼を超えてな。

エドガーが演じて見せる狂騒、その自意識的な演技は、演劇がそうであるように、エクソシズムもまた演技によって成立するフィクションであることを示唆する。

喜劇、問題劇、悲劇というジャンルの違いはあれ、『間違いの喜劇』では笑いの種として軽く言及されるにすぎないエクソシズムが、『十二夜』では辛辣なピューリタン批判へと発展し、『終わりよければすべてよし』、『リア王』においてはもはや完全にペテンとして描かれ、次第にその劇場性が前景化されていく。シェイクスピアのエクソシズムに対するこの認識の変化は大変興味深い。というのも、後述する同時代のエクソシズムにかんする論争が、シェイクスピアの劇作に影を落としている可能性が高いからである。

これらの作品において、「悪魔憑き」とされるアンティフォラス、マルヴォーリオ、フランス王、エドガーは、観客も周知のとおり、誰一人としてじっさいに狂ってもいなければ、悪魔に取りつかれているわけでもない。シェイクスピアにおけるエクソシズムの表象は、狂気という負のレッテルを悪魔の介在という説明原理によって貼り付ける行為を顕在化しており、悪魔から解放されるというドラマティックな展開、その劇場性を特徴とする。

シェイクスピアが『リア王』を執筆したさいに、エドガーの悪魔憑きの描写を国教会の聖職者であ

るサミュエル・ハーズネットの反エクソシズム・キャンペーンのパンフレットを参照していることは、ケネス・ミュア（Kenneth Muir）の指摘以来[4]、定説となっている。ハーズネットが著した２冊の反エクソシズム・パンフレット、すなわち『ジョン・ダレルの詐術の暴露』（*Discovery of the Fraudulent Practises of John Darrel*, 1599）および、『言語道断な教皇の詐欺に対する告発』（*A Declaration of Egregious Pope's Impostures*, 1603）が糾弾している対象は、1580年代にイエズス会士ウィリアム・ウェストンが行ったカトリック式エクソシズムと1590年代にジョン・ダレルが行ったピューリタンのエクソシズムである。とりわけ後者にかんしては、1597年にダレルがノッティンガムの少年ウィリアム・ソマーズに対して実施したエクソシズムの欺瞞性・狂言性が追及された。スティーヴン・グリーンブラット（Stephen Greenblatt）は『シェイクスピアの交渉』（*Shakespearean Negotiations*, 1988）のなかで、ハーズネットのパンフレットの戦略を宗教的カリスマの生成とそれをめぐる政治的権力闘争という観点から論じ、エクソシズムが共同体にもたらす演劇的効果（カタルシス）を指摘したが、エクソシズムの見物人たちがどのようにエクソシズムに臨んだのか、その娯楽文化史的意義には踏み込んでいない。

じっさいに16世紀末に行われたエクソシズムにおける見物人に関する言及を概観してみると、たとえば1564年にチェスターで行われたアン・ミルナーのエクソシズムでは町全体から人々が集まり[5]、前述のジョン・ダレルが1597年に行ったウィリアム・ソマーズのエクソシズムもまた、ノッティンガムの共同体全体を巻き込んだ大規模なものであり、150人以上の見物人が集まったと記されている。ダレルが1598年に出されたパンフレット、「ウィリアム・ソマーズの悪魔憑き、悪魔祓い、そして更なる悪魔憑きについての簡潔な叙述」（*A Briefe Narration of the Possession, dispossession, and repossession of William Sommers*, 1598）のなかでは、エクソシズムの過程を以下のように記述されている。

> The seventh day of November, being Monday was appointed for the exercise of prayer and fasting, to the end that the said Sommers might be dispossessed, which Almighty God, only at the prayers of Master Darrell and others to the number of one hundred and fifty persons brought to pass.
>
> （John Darrel, *A Brief Narration*, sig.B.I.r）

ピューリタンのエクソシズムでは、聖書に保証されている方法、すなわち祈りと断食（prayer and fasting）をもって儀式が執り行われるわけだが、そのためには見物人の存在は不可欠であり、聖水や十字架などの力を活用するカトリック式エクソシズムに比べて、より参加型の儀式であったといえる。このソマーズのエクソシズムの直後、ダレルはヨーク大主教から活動禁止を言い渡され、1599年、聖職剝奪の上一年間投獄されることになるが、本稿が着目するメアリー・グローヴァー（Mary Glover）のエクソシズムが行われたのは、まさにエクソシズムに関する国教会側の懸念と、この儀式の有効性を主張するピューリタン側の思惑が交錯する只中であった。従来、『リア王』におけるエドガーの悪魔憑きに関するイディオムがハーズネットの著作に依拠することが注目されるあまり、グ

[4] Muir, pp. 11-21

[5] Fisher,1565, sig.A.4.r, in Almond, 24

ローヴァーの事例が『リア王』に与えた重要な影響については等閑視されてきたきらいがある。

1602年に複数のピューリタンの聖職者によって行われたこのメアリー・グローヴァーのエクソシズムに関する論争は、悪魔憑きの症状が自然の原因によるものなのか、超自然の原因によるものなのかについて、聖職者のみならず王立内科医協会（college of physicians）の医師を巻き込んで行われたという点が注目に値する。なぜならば、1605年に執筆された『リア王』（1605）の主筋と副筋、すなわちリア王が体現する真正の狂気とエドガーが演じる悪魔憑きの狂気の対置構造は、メアリー・グローヴァー論争を強く反映している可能性があるからである。

2）メアリー・グローヴァーのエクソシズムを巡る三本のパンフレット

1602年に、メアリー・グローヴァーという名の14歳の少女がエリザベス・ジャクソン（Elizabeth Jackson）という老婆によって悪霊を取り憑かされたと訴え、この老婆が傍にいるときだけに発作が起きるという状況証拠から、悪魔憑きが疑われ、エクソシズムと魔女裁判へと発展する。このメアリー・グローヴァーのエクソシズムにかんして、３本のパンフレットがいずれも1603年に作られた。

悪魔憑き支持者として論陣を張ったのがピューリタンの説教者ジョン・スワン（John Swan）による「メアリー・グローヴァーの苦痛と断食と祈りによるその解放」（*A True and Briefe Report of Mary Glover's Vexation, and of Her Deliverance by Fastings and Prayer*, 1603）、および内科医協会のメンバーであるスティーヴン・ブラッドウェル（Stephen Bradwell）による「メアリー・グローヴァーの最近の悲痛な事例と喜ばしき解放」（*Mary Glovers Late Woeful Case Together with Her Joyful Deliverance*, 1603）の二本であり、他方、国教会お墨付きの内科医エドワード・ジョーダン（Edward Jorden）による「おっかさんと呼ばれるヒステリー症状に関する小論」（*Briefe Discourse of a Disease Called the Suffocation of the Mother*, London, 1603）は悪魔憑きを否定した。エクソシズムの有効性を主張するピューリタンと、エクソシストのカリスマ化を危険視した国教会の間で繰り広げられていたこの論争は『リア王』のプロットにも共鳴することになる。

ブラッドウェルの手記には、メアリー・グローヴァーの悪魔憑きは1602年の４月に始まり、彼女の発作的症状を見るために人々が見物に訪れたことが記されている。

> As for the noyse of feete and such other signes, let the reader know moreover, that there, it was an usual thing, daily, in times of her ordinarie fits, to have manie behoulders, coming in and going out, sometimes by troupes of .8 or .10 at once; and persons of worship and honor, which had waye made for them.
>
> （Bradwell, *Mary Glover's Late Woeful Case*, Fol.83v）

この資料はエクソシズムにおける多くの見物人（manie beholders）の存在を明らかにするものであり、その中には高貴高名な人物（persons of worship and honor）も含まれていた。そして彼らが目的としたのは、患者が示す日常的発作（ordinarie fits）であったことがわかる。エクソシズムの観客は、共同体による悪魔の追放という目的を遂行するのみならず、悪魔憑きが示す症状を見物の対象とみなしていたのである。メアリー・グローヴァーが示す発作の症状は、ウィリアム・ソマーズの場合と同様、見物人たちによって鑑賞される対象であった。その特徴は以下のジョン・スワンのパンフレットから

うかがい知ることができる。

> The afflicted party continued still in fits, whereof some were grotesque such as tossing her head, and having her shoulders, turning her body from side to side. And some again were more fearful such as her hip bone standing up in her belly at the place of her navel, accompanied with the former disfigurings of eye, mouth, hands, arms, fingers, throat, &c. And hereupon, there were many crying out amongst the company saying, 'Jesus help. Lord, show mercy. Lord, strengthen. Lord, confound Satan. Lord send deliverance.'
>
> (John Swan, *A True and Briefe Report of Mary Glover's Vexation*, pp.43-4)

スワンの記述によれば、発作はグロテスクなもので、頭部を激しく揺らし、肩を使って体を横にぐるぐる回転させ、目、口、手、腕、指、喉などを歪ませる（disfigure）、とあるように、悪魔憑き（demoniac）の患者が示す症状は、身体の歪な動きと各部位の変形を主な特徴とし、さらにエクソシズムの段階が進むと、この特徴はより強調される。

> Now,（as I saide）was shee entered into her sharpest conflict, now had Satan appalled her senses, especially benumbed the left side of her body, now her eyes fearfully turned upward, her tongue blacke and retorted inward, her countenaunce owglie & distorted, her mouth excessive wyde, gaping sometime more in length upwards and sometime againe more stretched out in bredth: her face fierce, sometime as if it were scornfullye disdayninge, sometimes terrible threatening, and so nodding her head and gaping upon the woemen that stood or kneled before her, as if shee would devoure them, then her head tossed from one shoulder to another, often and thicke and that with swiftness, and was sometime so farr writhed to the one side and stayed ther so long: as that I feared it would have remained. (*Ibid*, pp.40-1)

エクソシズムの最終段階では、サタンが少女の感覚を圧倒し、その恐怖に満ちた眼球は上向きになり、黒ずんだ舌は内部にねじまげられ、表情は醜く歪み、口は極度に大きくねじ開けられ、表情は険しく、侮蔑的な態度になる。ここで描かれているのは、14歳の女の子が凄まじい恐怖をもたらす（terrible threatening）存在へとメタモルフォーシスを遂げ、変貌する瞬間である。歪められた醜い顔で口を縦横に大きく開けて、跪く女性の見物人に迫ってくるその姿は、まさに人を食らう怪物の姿に他ならない。ピューリタンの神学生であるスワンのナラティヴは、'as if'や'as that'といった仮定法によって、彼の脳内に悪魔憑きのイメージを作り上げる性質のもので、異形の存在に対するこの神学生の想像力の豊かさを物語っている。メアリー・グローヴァーのエクソシズムに限らず、このような悪魔憑きの怪物的・動物的表象は枚挙にいとまがない。

> Her voyce at this time was lowd, tearfull and very strange, proceeding from the throat（like an hoarce dogge that barks）castinge from thence with opened mouth aboundance of froath of foame,［…］The noise and sound of her voyce one expresseth（in his noates of observation）by the word cheh cheh, or keck keck: another, by twishe twishe, or the hissinge of a violent Squibbe: another to an Henne that

has the squacke: an other compareth it to the loath some noise that a Catt maketh forcinge to cast her gorge: and indeede she did very often, & vehemently straine to vomitt.

（*Ibid*, p.42）

メアリー・グローヴァーの声はしわがれた犬（hoarce dogge）の鳴き声のようであり、口には泡をためる。チェ・チェ・チェとかケッケッケッとかトゥイシュトゥイシュなどといった異音、雌鶏や猫の鳴き声を発して、最後には異物を吐き出す。このような怪物化していく様は、見物人にとって恐怖の対象でありながら好奇心の対象であったかもしれない。とりわけロンドンのテムズ川南岸のバンクサイドに併設されていた、熊いじめ小屋や牡牛いじめ小屋の常連客ならば、このような人間の動物化も娯楽の対象になりえたであろう。

このような悪魔憑きの身体性、動物性は、『リア王』のエドガーによる気違いトムの演技において、中心的な役割を担うものである。

EDGAR

The country gives me proof and precedent
Of Bedlam beggars, who, with roaring voices,
Strike in their numbed and mortified bare arms
Pins, wooden pricks, nails, springs of rosemary;

（*Lr*, 2.2.187-190）

この国にはそのための証拠と前例がある、
ベドラムの乞食のことだ。奴らはうめき声をあげ、
萎えて感覚を失ったむき出しの腕に、
針、木串、釘、ローズマリーの小枝などを突き刺している。

気違いに扮することを決意したエドガーが語るステレオタイプとしてのベドラムのトムは、恐ろしい声で喚き散らし、むき出しの腕に小枝を突き刺すといった、身体的拷問を受けているふりをする乞食である。エドガーの悪魔憑きは、精神的な苦悩よりもむしろ、徹底的に肉体的な拷問として表象される。

EDGAR

Poor Tom, that eats the swimming frog, the toad, the tadpole, the wall-newt and the water -; that in the fury of his heart, when the foul fiend rages, eats cow-dung for salads; swallows the old rat and the ditch –dog; drinks the green mantle of the standing pool; who is whipped from tithing to tithing, and stocked, punished and imprisoned- who hath had three suits to his back, six shirts to his body.

（*Lr*, 3.4.126-133）

哀れなトムだ。食い物は、アオガエル、ヒキガエル、オタマジャクシ、ヤモリにイモリ。でもな、悪魔が暴れだして俺もむしゃくしゃしてくると、サラダの代わりに牛の糞だって食う、

腐ったドブネズミや溝に捨てられた犬の死骸も丸呑みだ。溜り水のアオミドロをごくごく飲むんだ。鞭で打たれて、村から村へ追いやられたり、足枷をはめられたり牢屋にぶち込まれたり。

エドガーにかんする限り、悪魔憑きは身体的な症状しかしめされない。このように、『リア王』において、悪魔憑きと悪魔祓いにかんする宗教的な真実は身体的な現実として可視化される。グロスターをドーヴァの崖へと導き、まさに悪魔を払った後のエドガーは、悪魔を動物と人間の混交した怪物として表現する。

EDGAR
As I stood here below, methought his eyes
Were two full moons. He had a thousand noses,
Horns whelked and waved like the enraged sea.
It was some fiend.

（*Lr*, 4.5.69-72）

ここに立って見てたんだがね、目ときたら二つの満月、鼻は一千もついてたな。ねじれた角はまるで逆巻く海の波頭だ。ありゃ悪魔かなんかだ。

エクソシズムにおいては、悪魔憑きの身体は悪魔の媒体であり、このような人間が怪物化する空間を提供していた。そこで悪魔憑きは、徐々に人間としてのアイデンティティを乗っ取られ、狂人同様、意思疎通ができない存在へと変身する。悪魔憑きの身体は、精神の変容を肉体の変容として表象する媒体であり、その視覚的な変容こそが、見物の対象であった。このような恐怖と驚異の対象としての悪魔憑きと狂気的な発作は、言い換えれば、人々にその原因を解釈させる余地を生むことになる。

３）ヒステリア（hysteria）と悪魔憑き（possession）

社会学者のマイケル・マクドナルド（Michael MacDonald）は、メアリー・グローヴァーをめぐる一連の騒動において、グローヴァー家が見世物小屋の様相を呈していたことを指摘し、見物人の目的は好奇心だけでなく、悪魔憑きの示す症状が超自然的（supernatural）なものであるか、自然なものであるか（natural）を確かめることであったと指摘する。シェイクスピア時代の狂気の説明原理は医学上のメランコリー・モデルと、神学上のポゼッション・モデルに大別されるが、同時代の体液理論者・神学者の多くが論じているように、狂気には自然由来のものと超自然由来のものが想定されており、例えばマクベス夫人の狂気が従来のガレノス医学モデルでは治療不能と診断を受けるように、悪魔学的な処置、すなわちエクソシズムに拠らねば治療不可能な病の領域が開かれていた。

These ‘trials’ and ‘experiments’ were spectacular events, and Glover’s fits became a kind of show. The house was jammed with people: pious Puritans awestruck by the evident power of Satan, more skeptical observers wanting to see for themselves whether Glover’s illness was natural or supernatural

and the merely curious.

（MacDonald, *Witchcraft and Hysteria in Elizabethan London,* xiii）

16世紀末に行われた一連のエクソシズムが、悪魔憑きが本物なのかペテンなのかを争点とした聖職者同士の論争であったのに対し、このメアリー・グローヴァーの事例の特異な点は、患者が示す症状の原因として悪魔憑き以外にヒステリア（Histeria）、別名「おっ母さん（the mother）」と呼ばれる医学的原因を想定し、王立内科医協会の医者たちが論争に加わったことである。

メアリー・グローヴァーのエクソシズムにかかわったエドワード・ジョーダンは、メアリーの示す症状は悪魔による超自然的なものなどではなく、ヒステリアに由来するものだと一貫して主張した。一方、ピューリタンの内科医スティーヴン・ブラッドウェルのパンフレットでは、悪魔憑きの原因は以下のように分析されている。

Doctor Spencer argued from the improbabilitie of necessary causes, in so young a mayde, as also from the disproportioned moving in her belly, which was not so uniformely a risinge or bearing upward, but in a rounder and narrower compasse, playing up and downe, as with a kind of easie swiftnes, that certainly it did not truly resemble the mother; howsoever som accidents seemed to carie cullour that way. He stood also upon the varietie of the fits, upon the occasion of the womans presence. Against these, stood up Doctor Argent, and Doctor Jordayne, two Phisitions, with a certaine Doctor of Divinitie, men not served with writtes for the Court, as the order is. This Divine laboured to purge Elizabeth Jackson, of being any cause of Mary Glovers harme. These Phisitions sought earnestly, to make the case a mere natural disease:

（Bradwell, *Mary Glover's Late Woeful Case,* Fols.36v-37v）

ここでブラッドウェルは、ピューリタンであるスペンサー医師がメアリーの症状が全くヒステリアではない（certainly it did not truly resemble the mother）と診断しているにもかかわらず、国教会の医者アージェントは自然の病気にするために全力を尽くしている（These physicians sought earnestly, to make the case a mere natural disease）と批判している。狂気的症状に対する原因に悪魔が介在するか否か。ルネサンス病理学の核心ともいうべき問題が、当時の知識人によってメアリー・グローヴァーの身体を巡って議論され、従来のガレノス医学ではおよそ説明不能である症状にたいして、悪魔憑き否定論者たちが理論武装の盾としたのが、ヒステリア理論ということになるだろう。

このような狂気の原因探しというテーマはもちろん『リア王』の専売特許ではなく、『ハムレット』や『マクベス』をはじめ同時代の劇作品のなかでも繰り返されるものであるが、本稿がメアリー・グローヴァーの事例と『リア王』の関係に着目する大きな理由の一つは、エドワード・ジョーダンの論文がヒステリア（hysterica passio）について英語で書かれたおそらくは初の医学書であり、まさに『リア王』においてリアが体現する錯乱は、彼自身が述べるようにヒステリアとして説明されるからである。

LEAR

O, how this mother swells up toward my heart!
Histerica passio down, thou climbing sorrow;
Thy element's below. （*Lr*, 2.2.249-51, emphasis mine）

ああ、「おっ母かさん病」が心臓まで膨れ上がってくる！
'Histerica passio' よ、鎮まれ、湧き上がる悲しみ、
お前の居場所は下だ。

Oh, what a combat feeles my panting heart［…］This trobbing heart is pearst with dire annoys.
（*The True Chronicle History of King Leir*, sig. A4^{r}, emphasis mine）

リアは、自らの狂気の原因を'Histerica passio'に求める。『リア王』の先行作品である『レア王年代記』（*The True Chronicle History of King Leir*, 執筆c.1590, 出版1605）では「喘ぐ心臓」（my panting heart）と表現された苦痛をシェイクスピアは'Histerica passio'に差し替えた[6]。

ここでリアは狂気の元凶である'Hysteria'の居場所は下の方（below）というが、それは子宮にほかならず、リアの身体はここで女性として表象されている点は大変興味深い。なぜなら、ヒステリアは子宮から生じ、主な原因は女性の性的欲求不満とされ、そのような欲望はこの劇の中では明らかに不倫願望を抱く二人の娘（ゴネリル・リーガン）によって表象されるからだ。領地とタイトルとともに男性性をも失ったリアは、いまや女性の身体のメタファーで表象されることになる。

『リア王』の主筋にあたるリアの狂気・錯乱はこのように自然の病として決定づけられる一方、副筋のエドガーの発狂については、超自然の狂気として悪魔憑きが演じられる。そしてその悪魔は怪物としてスペクタクルに表象される。現実世界において、エクソシズムの狂人見物が患者のスペクタクルな身体の一種の解読作業であったことになるが、『リア王』の劇世界においては、リアの真正の狂気、エドガーによって演じられる狂気の真の原因が、悪魔憑きではなく家族問題に端を発するものであることを観客は知っている。メアリー・グローヴァーの示す狂気的症状が演じられたものであれ、真正のものであれ、そこにはペテンという名の「劇場」が生まれていたのである。

4）結び

本稿では、『リア王』におけるエクソシズム分析で等閑視されてきたメアリー・グローヴァーのエクソシズム（1602）が、その狂気的症状の原因を自然の病として'hysteria'に求めるか、超自然的な'possession'に求めるかという点に関して政治的、宗教的、医学的論争を巻き起こし、これにかんして出されたパンフレットがそれぞれの立場を主張する中で、演劇の世界では『リア王』における狂気

[6] アーデン版シェイクスピア全集第３版の編者R.A.フォークス(R.A. Foakes)は、シェイクスピアがこの語をハーズネットの『告発』におけるリチャード・メイニー (Richard Mainy)の告白（1602）の中から発見したと説明しているが、男性が罹患しているという共通点はありながらも、このメイニーの事例は悪魔憑きの症例の一つとして'the mother'が挙げられており、なおかつ'Histerica passio'というラテン語は使われていないことから、ジョーダンのパンフレットがソースであると考える方が妥当に思われる。

の表象に重要な影を落としていることを指摘した。

エドワード・ジョーダンひいては国教会は、超自然的な因果関係、すなわち悪魔憑きとエクソシズムを否定あるいは弱体化させることを試みていたが、『リア王』の世界においてもまた、超自然的な悪魔憑きを演じるエドガーと生理学的に病んでいくリアの対置によって、狂気の原因が問い直される。そこでは、悪魔憑きが「いかさま」として表象されることで超自然的な説明は劇世界から排除され、一見すると『リア王』という作品はジョーダン、そして国教会の主張を裏付けるような構造を備えている。しかしながら、『リア王』は国教会の主張をただ追認しているのではなく、狂人見物という娯楽が悪魔憑きとされた者の身体的な変容を楽しむ娯楽であったように、人間が人間でないものに変わりゆく狂気のメタモルフォーシスによって、視覚的かつプリミティブな娯楽を提供していたといえる。

［本論文は第59回シェイクスピア学会（オンライン開催、2021年10月９日）における研究発表「狂気のメタモルフォーシス―シェイクスピア作品におけるエクソシズムの表象とその娯楽性」に加筆を施したものであり、JSPS 科研費・基盤研究Ｂ「娯楽文化史からとらえるエリザベス朝演劇―社会変化が生みだす総合エンターテイメント」（研究代表者・篠崎実／課題番号19H01238）による研究成果の一部である］

Select Bibliography

Almond, Philip C. *Demonic Possession and Exorcism in Early Modern England, Contemporary Texts and Their Cultural Contexts*. Cambridge: Cambridge UP, 2004.

Anon. *A Briefe Narration of the Possession, Dispossession, and Repossession of William Sommers: and of Some Proceedings against Mr John Darrell Preacher, with Answers to Such Objections as Are Made to Probe the pretended Counterfeiting of the Said Sommers*, 1598, sig.B.I.r.

Anon. *The True Chronicle History of King Leir*,1605; rpt. Tudor Facsimile Texts, 1910, sig. A4r

Brownlow, F.W. *Shakespeare, Harsnett, and the Devils of Denham. Cranbury*: Associated UP, 1993.

Coventry, William W. *Demonic Possession on Trial, Case Studies in Early Modern England and Colonial America, 1593-1692*. New York: Writers Club, 2003.

Dijkhuizen, Jan Frans van. *Devil Theatre, Demonic Possession and Exorcism in English Renaissance Drama, 1558-1642*. Cambridge: D.S. Brewer, 2007.

Foucault, Michel. *History of Madness*. Edited by Jean Khalfa. Translated by Jonathan Murphy and Jean Khalfa. London: Routledge, 1961.

Gibson, Marion. *Possession, Puritanism and Print*. New York: Routledge, 2015.

Greenblatt, Stephen. Shakespearean Negotiations: The Circulation of Social Energy in Renaissance *England*. Berkeley: U of California P, 1988.

Kallendorf, Hilaire. *Exorcism and Its Texts, Subjectivity in Early Modern Literature of England and Spain*. Toronto: U of Toronto P, 2003.

MacDonald, Michael, ed. *Witchcraft and Hysteria in Elizabethan London: Edward Jorden and the Mary Glover Case*. London: Routledge, 1991.

Moss, Stephanie and Kaara L. Peterson eds. *Disease, Diagnosis, and Cure on the Early Modern Stage*. London: Routledge, 2016.

Muir, Kenneth Samuel. "*Samuel Harsnett and King Lear." The Review of English Studies*, 2.5（1951）:11-21. Web.

Neely, Carol Thomas, *Distracted Subjectss: Madness and Gender in Shakespeare and Early Modern Culture. Ithaca and London: U of Cornell P,* 2004.

Proudfoot, Richard, Ann Thompson and David Scott Kastan, eds., *The Arden Shakespeare Complete Works*. London: Bloomsbury, 1998.

Sands, Kathleen R. *Demon Possession in Elizabethan England*. Westport: Praeger, 2004.

Swan, John. *True and brief report of Mary Glovers vexation and of her deliverance by fastings and prayer, 1671*. in MacDonald.

Thomas, Keith. *Religion and the Decline of Magic. Studies in Popular Beliefs in Sixteenth and Seventeenth-Century England*. London: Weidenfeld and Nicolson, 1971.

Walker, D.P. *Unclean Spirits, Possession and Exorcism in France and England in the Late Sixteenth-Centuries*. Philadelphia: U of Pennsylvania P, 1981.